

海 辺

訳 村 松 眞 一
(静岡大学名誉教授)

坊さんの通知によると、焼津の、溺死したすべての人々のために、施餓鬼会が、午後2時から浜辺でとり行なわれるとのことであった。焼津は、そもそも非常に古い所で（それは、日本最古の年代記に、「やきづ」の名前で出ている）何千年もの長い間、焼津の漁民は、毎年きまって、大海に人命の犠牲を払ってきたのである。それで、坊さんの通知で思い出したのは、仏教よりはるかに古いこと。つまり溺死した人々の霊が、永遠に波とともに漂っているという空想である。この信仰に従えば、焼津の沖には霊がいっぱい群がっているに違いない……。

午後早めに、その準備を見ようと、私は浜辺に出かけた。そこには、すでに大勢の人たちが集まっていた。7月の焼けつくような真昼で、空には一片の雲も見えない。岸辺の粗い小石は、灼熱の太陽の下、溶鉱炉から掻き出されたばかりの鉱滓のように熱気を放っている。しかし漁民たちは、全身赤銅色に日焼けして、この強い陽射しを何とも思わない。彼らは焼けた石の上に座って待っている。ちょうど海は引き潮で凪いでいて、のたり、のたりと、長いものうげなさざ波を立てていた。

浜辺には、およそ4フィートの高さに、一種の粗末な祭壇が建てられていて、この上に大きな白木のイハイすなわち死者銘板が一つ、海の方へ背を向けて置かれていた。この位牌には、大きな漢字で「三界萬霊位」と記され、それは三つの存在状態の、無数の霊の休息場所「または座席」という意味である。さまざまな食物のお供えが、この位牌の前にあげてある。そのなかには、お碗一杯のごはん、お餅、なす、なし、それに切りたての蓮の葉に盛った、いわゆるヒヤクミノオンジキ（百味の飯食）と言われるものもある。それは、名前が表す意味は百種類の異なる滋養物であるが、実際は、ごはんとなすの薄切りを混ぜたものである。ごはんを盛ったお碗には、小さな箸が立てられ、切れた色紙をそれに貼りつけてある。また蠟燭、香炉、線香の束、水鉢、それに仏に供えられるシキミの枝を入れた一对の竹筒も目にとまった。水鉢の横にはミソハギの束が置いてあって、仏式の規定に従い、お供物の上へ、それで水をふりかけるのである。

祭壇を支える四本の柱には、それぞれ切りたての竹が結びつけてあった。また祭壇の左右には、別の竹がつき立ててあって、その竹の一本一本に漢字を記した小旗がしぼりつけてあった。祭壇の四隅の竹につけた旗には、四天王の名とその属性が書いてある。西方の守護神・増長天王、東方の守護神・持国天王、北方の守護神・多聞天王、それに南方の守護神・広目天王。

祭壇の前にはむしろが敷かれていて、およそ長さ30フィート、幅15フィートの浜辺の場所を覆っていた。そしてこのむしろを敷いた場所の上には、坊さんたちを強い陽射しから守るため、青い綿布の日除けが張りわたされていた。私はしばらくこの日除けの下に座って、祭壇とお供物のスケッチをした（これ

はあとで日本の友人に頼んで修正し、仕上げてもらった。）

施餓鬼会は定刻には行われなかった。坊さんたちが見えたときには、3時近くなっていたに違いない。坊さんは7人、大会式の衣をまとっていた。その後に小坊主たちがつききて、鐘、経本、床几、経机、その他必要な道具類を運んできた。坊さんと小坊主が青い日除けの下の席についた。見物人は日除けの外、炎天下に立っていた。坊さんの中でただ一人、主僧が祭壇に向かつて座った。他の僧たちは小坊主とともに、その左右に、互いに向き合って二列になるように座った。

祭壇上のお供えをいくらか並べ直し、線香に火をともしてから、本来の儀式

は、仏教の讃歌すなわち伽陀ガタで始まった。それは拍子木と鐘の伴奏で合誦するのである。鐘は二つ 大きな太い響きの鐘と、いい音色の、小さな鈴とがあつて、小さな男の子の受持ちであつた。大きな鐘はゆっくり叩き、小さな鈴は早く打ちならず。そして拍子木は、ほとんど一組のカスタネットのように力チ力チならずのである。そして役僧たちが一斉に合誦する伽陀の効果は、この特異な楽器編成と相俟つて、不思議でもあり、またはなはだ印象深いものであつた。

比丘比丘尼

發心奉持

一器淨食

布施十方

窮盡虚空

周遍法界

微塵刹中

所有国土

一切餓鬼

先亡久滅

山川地主

乃至曠野

諸鬼神等

請來集此……

この短い朗々たる韻律は、祈願や呪文の合誦に、とりわけふさわしいように、私には思われた。そして施餓鬼会の伽陀は、実際、まぎれもない呪文であつた。それは以下の自由訳が明らかにする通りである。

私たち比丘と、比丘尼は、この淨食を盛った鉢をささげ奉り、例外なく十方世界と、それを囲む法界と、この現世のあらゆる場所、寺の中の微細な塵の中にまで住む一切の餓鬼たちに、この同じお供物をそなえます。そしてまた、こ

の世を去つて久しい諸靈に、また山や川や土の、そして荒地の主靈にもそなえます。それゆえどうか、諸鬼神よ、これらに近寄り、お集まり下さいませうように。私たちはいま、憐れみと同情から、あなた方に食物を差し上げたいと思ひます。あなた方が一人残らず、この私たちのお供物をお召し上がり下さいませうように。さらにまた、虚空界の中に住む一切の諸仏、諸天に礼を尽くして、あなた方ならびに欲望を有する一切の存在が、満足を得ることが出来ますようにとお祈りをいたします。陀羅尼をお唱えする功德によつて、このお供物を召し上げることによつて、みなさま方がさらに高い知識を得られ、あらゆる苦しみから逃れて、やがて天界に生まれ変わり、そこであらゆる至福を知り、十方界を自由に動きながら、至るところ、喜びを見出されますようにとお祈りをいたします。ご自身の中に、菩提心を起こされますよう。悟りの道に従われませう。仏道に立ち上げられますよう。もはや後戻りをなされませぬよう。また途中でくずくずされませぬよう。その道に最初達せられた方は、あとの者を導かれ、自由になられることを、めいめいお誓い下さいませうに。またあなた方が今こそ、私たちを日夜見まもり、守護されますように願ひ奉ります。そして今、この食物を差し上げて、私たちの願ひが届きますよう、お助け下さい。

すなわち、この行為によつて生ずる功德を、法界に住む一切のものに及ぼし、

みちから

この功德の御力よつて、宇宙の真理が一切の法界にあまねくゆき互るよう、そしてその中の一切のものが最高の悟りを見出し、すべての叡智を得られますようお助け下さい。そして今私たちは、あなた方のこれからの行ないが、功德を積まれるお役に立ち、仏道への道を得やすくされるようお祈りいたします。こうして、あなた方がすみやかに仏になれますよう、私たちは切に願ひいたします。」

それから、この法要の最も奇妙な部分が始まった。すなわち、お供物に水をふりかけて捧げ、同時に、ある陀羅尼つまり梵語のおまじない言葉からできている呪文の句を唱えるのである。儀式のこの部分は簡単であつたが、その詳細を数え上げるとなると、多くの紙面が必要になる。主僧の言葉や身振りが、一つ一つ方式に従っているからである。例えば、陀羅尼を唱える間、坊さんの手と指は、とくにその陀羅尼に定められた位置に保たれていなければならない。しかし、この複雑な儀式の主な次第は、およそ次のようなものである。

まず初めに、十方界から精霊を呼び集めるために、招来の陀羅尼を7回唱える。それを唱える間、主僧は右手を差し出し、中指の先と拇指の先をふれ合せて、他の指は広げておかねばならない。次にこれとは違つが、同じく不思議な身振りで、地獄の門扉を破る陀羅尼を唱える。次にはセカン口つまり甘露を施す陀羅尼をくりかえす。この功德によつて、お供物が諸靈のために天上の甘露と食物に変わると信じられているのである。そしてそのあとには3度、五如来への祈願が唱えられる。

宝勝如来に帰依し奉る

これにより「餓鬼たちの」あらゆる欲望の業を

救い、至福もて満たされんことを！

妙色身如来に帰依し奉る

彼らの醜い形相すべてを除かれんことを！

甘露王如来に帰依し奉る

彼らの心身を清め、心の平安を与えられんことを！

とを！

広博身如来に帰依し奉る

彼らの美味の楽しみを授けられんことを！

離怖畏如来に帰依し奉る

彼らの恐怖をすべて除き、餓鬼道より彼らを救い出されんことを！

『梵行施餓鬼問弁』という書物はこつ述べている

僧侶がかように五如来の御名を唱え終われば、仏の御力みちからによって、すべての餓鬼は前世の罪業より救われ、無量の至福を享け、優れた容姿五体を授かり、一切の恐怖を免れ、かくて美妙なる甘露に変じた供物をともに味わつて後、必ず浄土に生まれ変わるであらう。

五味来への祈願のあと、別のお経が唱えられる。そしてこの合誦の間に、お供物を一つずつ下げる。(祭壇から下げたお供物は、柳、桃、またはザクロの木の下に置いてはならないという不思議な規則がある。)最後に、退散の陀羅尼を7回唱え、坊さんは毎回指をはじき、諸靈に自由に帰つてよいという合図をする。これを撥遣と言つ。

海は、この急な海岸では遠くへ引くことはない。もつとも、恐ろしい勢いで寄せてきて、町へドツと流れこむことも多い。だからもつと凪いだ感じでも、あてにはならないのである。用心のため、位牌置き台の柱は浜に深く打ちこまれていた。この日の出来事でわかったことは、この用心が無駄でなかったことである。というのは、儀式が、坊さんの遅刻で、潮の変わり目になってやっと始まつたからである。伽陀の合誦の間にも、海は荒れ、暗くなつた。それから、あたかも外海が応えるかのように、雷鳴のような碎ける大波の音が、坊さんの声や鐘の音を消してしまつた。まもなく、また一つ大波がドツと打ち寄せ、それからまた一つ。こうして陀羅尼の合誦の最中、祈禱の声は、わずかに波が碎けるその合間に聞こえるだけで、その間、波の泡が波打ち際の斜面一面を覆い、祭壇まで二、三步のところまで、巻き上がるようにサツと音を立てて飛んできた。

それから、またもや私は、死者と海の間何かおぼろげな関係の古い信仰について、思いふけていた。そのとき、この原始的な空想の方が、あの36段階のもの凄い苦痛がある餓鬼道の恐ろしい教えよりも、飢えと業火にさいなまれる鬼たちがいるというあの教えよりも、一層合理的で人間らしい温かみがあると、私には思われた。いや、まったく哀れな亡者たち！なぜ彼らは、人間の判断によつてあんなに醜い姿になり、悪運を決めつけられねばならないのか？川の流れや風や雲と混じり合っていると、花の心を活気づけているとか、果

実の頬を赤く染めていたりとか、あるいは森の寂しい場所で蝉と一緒に鳴いているとか、夏の夕暮れ、蚊の群れと一緒にかすかな羽音をたてていると想像する方が、ずっと賢く思いやりがある…… 飢えに苦しむ靈魂などというものは、私は信じない 信じたくない…… 靈魂は死ぬとすぐ、魂が宿る塵に分解してしまうものだと私は考える もっとも、その塵の原子は、別の靈魂になるために、他の霊とその後結合する。……でもやはり私には、消失したものが、以前より粗い物質になっても、完全に死滅してしまふとは信じられないのである。いかに分解し、四散しようとも、それは疾風の中を飛んでいたたり、霧の中に浮かんでいたたり、木の葉の中に震えていたり、海水の光の中に明滅している…… あるいは、大波が轟く中に、どこか淋しい岸辺に打ち上げられ、小石の響きとともに、白い、身をもがく泡となっている……。

儀式が終わると、一人の漁師が、日除けの柱を軽々と天辺まで登った。そこで体操でもするように身構えると、たくさんの小さな餅を、集まった人々の上へバラバラと撒き始める。それを、子供たちがキャツキャツと笑いながら奪い合った。あの気味わるい厳肅な儀式のあと、こんな歓声があがったのにはびっくりした。しかしまた、それが非常に自然で、愉快で、人間的だと思った。一方、7人の坊さんたちは、色とりどりの行列で立ち去った。小坊主たちは、その後ろから、経机や床几や鐘など重いものを背負って、大儀そうにとぼとぼとついていく。まもなく会衆も散った 餅は全部分配され、各自のふところに収まって。それから、祭壇、日除け、むしろが取りはらわれた。こうして驚くほど短期間で、あの奇妙な儀式は、跡形もなく消え失せてしまった…… ふと私はあたりを見回した。岸辺には私がひとりきり…… 聞こえるものは、ただ、再びさして来た満ち潮の音、並外れた、ぞっとするような海鳴りの音 　ただ、これも、静かに眠っていた何か名づけようもない生きものが、計りしれぬ苦痛に目覚めたかのようである……